

県内へのカジノ導入を考
えるシンポジウムが六日、
沖縄大学であり、賛否双方の
の識者や教育、精神医学の
専門家が意見を交わした。
国会でカジノ合法化へ向け
た議員連盟の動きが活発化
しているため、議論は白熱
した。同大学土壇講座の一
環で、約三百人が聞き入っ
た。

か上がり生活環境は悪化した「ディィラーの専門学校に行く若者が多く、地域の将来が心配。子どもにはさせたくない」との声や、カジノと性産業がセットになつて実態を報告した。その上で「自然再生の公共交通制度活用など身の丈に合った方法で、沖縄の良さを生かした観光振興に取り組むべきだ」と訴えた。

シンボジウムでは、ギヤンブルや薬物依存に詳しい医師の稻田隆司さんが、ギヤンブル依存で受診した八十九人のデータを提示。「患者は少なく言う傾向がある

ので控えめな数字」と上で、賭博に使つた金平均が五百二十六万円、債務平均が二百四十万円統計を示した。

した %、離婚率が 15%、県内平均を大きく上回ることも指摘。依存症により本人、家族、雇用者、社会それぞれにコスト、生産性低下の負担がかかること、外

と訴えた。沖縄社会を生命体に例え、「カジン」は劇薬に近い。外科的手術に体が耐えられるか、漢方のようじつくり取り組むべきか」と提起した。

依存の姿認識必要 医師専門

生活に悪影響・観光を振興…
カジノ導入賛否白熱

沖大でシンポ

力としてカジノ導入を意図し、そのための検討委員会を立ち上げる一方、「沖縄振興特別措置法」を活用できなかなど動きを本格化させています。

私たち「カジノ問題を考える女たちの会」は沖縄観光の発展は、持続可能な沖縄の豊かな自然環境と、安全で安心、健全

法改正で特例化し、沖縄の歴史や文化および自然から隔絶された施設となる「賭博場」が観光振興なのか理解に苦しみます。カジノが観光産業の一環として位置付けられ、経済振興の起爆剤のように論じられる昨今的一部論調に危惧の念を抱き、これまでラスベガス・モナコ・オ

し、十一あつた方ジノは三年間で二十四施設に増えました。暮らしは良くなつたとする半面、子どもたちの将来への不安を指摘する声も聞きました。教育問題、居住環境の悪化、生活費の高騰など、若者が中国本土に流出するという新たな不安材料も抱え込んでいます。

す。コーディネーターにはフリージャーナリストの寺田麗子さんが当たります。

土曜教養講座は六日（土）午後一時から沖縄大學1号館601教室で開きます。多くの県民の参加を呼びかけます。（カジノ問題を考える女たちの会共同代表）

論壇



卷数 魔子

カジノ導入の動き危惧

沖大講座で「光と影」討議

カジノを觀光の切り札に、と考える人々は今なお後を絶ちません。国会では「国際觀光産業としてのカジノを考える議員連盟（カジノ議連）」が觀光庁設立の動きと並行して活動を活発化させています。

沖縄では仲井眞弘多知事が「観光客一千万人誘致」の推進

な社会環境の中にこそあり、観光振興の方向は県民と観光客のオーブンな交流の中に求められるべきとの観点からカジノ導入には一貫して反対してきました。

リストラリア・マカオ等のカジノの実態について調査し報告してきましたが、今回は沖縄大学の土曜教養講座においてカジノの問題を取り上げます。

土曜教養講座の開講に当たつてマカオの現状に触れますと、マカオでは外資と地元の共同経営も合わせ六社がカジノを経営

十一曜教養講座では県議会の各会派の代表による意見表明のほか、稻田隆司かいクリニック院長による「病的賭博（ギャンブル依存症）」の実態と医療の現場から」と題しての基調報告、カジノをめぐる国会の動き（糸数慶子）の後、パネルディスカッションでは、「カジノの光と

沖縄タイムス 2008年12月7日

沖縄タイムス 2008年12月3日

2008.12.3 沖縄タイムス



浦添市議会議員選挙は2009年2月8日です 豊かで住みよい街づくり

とう山勝利